



「外」と「内」を自由に行き来し生まれる照明デザイン



照明デザイナー

Ishii Moko

石井 幹子

それまでの日本になかった職業分野である「照明デザイン」を海外で学び、東京タワーや歴史的建造物のライトアップなどを通し、夜景に親しむという新たな日本のライフスタイルまで生み出し定着させた石井幹子さん。その発想力と行動力はいったいどこからくるのだろうか？

「外」と「内」を自由に行き来する思考の術や、景観としての文化の捉え方、さらに女性の社会進出についてなど幅広く語っていた。

取材：執筆／脇坂敦史 撮影：川上尚見 写真提供／石井幹子デザイン事務所

代表作でもある
東京タワーのライトアップ。
開業50周年記念の
「ダイヤモンドヴェール」では
さらに印象的にタワーを彩った。



海外で 実際に生活してこそ 得られるもの

モノの形をつくるのではなく、それを照らし出す「光」をデザインしてみたい。日本の照明デザイナーの草分けである石井幹子さんが若き日に抱いた志は、「ライトアップ」はもちろん、「照明デザイン」という言葉さえまったく認知されていなかった1965年の日本では、まだ誰も見たことのない「夢」だった。しかしそのころ、東京藝術大学を卒業後に東京・銀座のデザイン事務所として働きはじめ、務所で工業デザイナーとして働きはじめ、それは迷いのない一筋の光の道のように

なものだったようだ。当時を思い出しながら、石井さんは感慨深げに語ってくれた。

「私は、本を通して知った北欧のデザインの美しさに強く憧れていました。フィンランドについての情報は、ほかにほとんどありませんでした。あの頃の東京はまだ未舗装の道がたくさんあって、ドブが流れ、雨が降ると靴が泥で汚くなるようなところ。それに比べ、フィンランドの首都ヘルシンキは街全体があまりにも美しく、まるで別世界のように見えました」

あらゆる情報があふれ、世界が狭くなってしまった今。その頃20代の日本人女性が未知の世界へ飛び込んでいくときに抱いた心意気や驚きがどんなものだったか？ 想像するのは簡単ではない。

「たしかに今はインターネットを通して何でも見たり知ったりすることができ、から、わざわざ現地まで行く必要はないと考える人もいるようですね。でも、最低でも1年は海外で暮らし、四季を通して生活を体感することの意味は大きいです。それは昔も今も同じです。たとえばヘルシンキで友人の家などを訪ねると、素晴らしいモダン・デザインの食器や家具が当たり前のように使われていて驚きました。社会全体がグッドデザインを必要とし、

支えている。そういう状況が知識ではなく、実感としてよくわかりました」

フィンランドで約1年をすごし、有名な照明器具デザイナーのもとでアシスタントとして働いた経験は、単なる職業経験としてだけでなく、その後の石井さんを形成するかけがえのない土台となった。

「師であるリイサ・ヨハンソン・パッペさんをはじめ、仕事をすると魅力的な女性にたくさん出会ったことが大きかったですね。日本ではまだ、女性は独身で仕事をしているか、結婚して辞めているか、ほぼふたつにひとつでした。フィンランドでは結婚している人も、独身の人も、ひとり子どもを育てている人も、友達と一緒に暮らしている人もいましたが、みな誇りと覚悟をも

って働いている。そのことに驚き、勇気づけられました。今の日本でも働く女性の数は増えましたが、人生と仕事

に対して彼女たちと同じような覚悟をもっている人がどれだけいるか、少し疑問を感じることもあります」

グローバルとローカル、ふたつの物差し

その後はドイツへ移り、照明器具をつくるプロダクト・デザインから空間全体の照明へ、さらに重要な仕事も任されるようになっていく。

「私自身は自分の手を動かして働くことが好きでした。数カ月間ベルリンで学校に通ったこともあるのですが、決めませんでした。デザインや建築に限らず、世界中で共通言語がもてるような職種であれば、海外でも仕事をすることができるとしよう。海外で働くことは、学校で学ぶことのできない貴重な体験ができることだと思います」

フィンランドでもドイツでも、もちろん言葉の壁はあった。それでも、「共通言語」であるデザインの力でそれを乗り越えることができたという。

「物事を考えたり、頭のなかで構築していくというとき、基本となるのは言語です。言いたいことを、ちゃんと言えることが大切。ちゃんと考え、ことさえてできれば、それを必要に応じて英語やドイツ語に置き換えることは、難しいことじゃないと思っています。ですから、小さいときから英語を勉強す

とができる。私は、みんなで合意形成をしながらかつুক্তっていくのではなく、独断と偏見によってつくるタイプの人間です」

1枚の絵やひとつの彫刻をつくるのと違い、照明デザインには多くの人と共同作業も必要となる。それでも、頭のなかにある確信めいた「何か」を現実化するうえで、言葉の違いは本質的な障害にならない、ということなのだろう。

「とはいえ、グローバルな判断基準や技術といったものだけに目を向けているのではありません。ローカルな価値観や伝統といったものには、いつも興味をもっています。たとえば、アメリカ人のクライアントや審査員だったらもつとこんな趣向を凝らしたほうがよいのではないかと、といったことはいつも念頭に置いています。自分のポケットには、グローバルとローカルのふたつの物差しがあつて、必要に応じて使い分ける。ふたつを対立させるのではなく、高い次元で融合させていこうという使い方ですね」

辛口の日本評にもつと耳を傾けるべき

石井さんの仕事は早くから世界で認められ、北米やアジア諸国にも活動の場を広げていった。現地のニーズに合

きたものがきれいで大切なものだという発想が基本にあります。明治以降の日本には、それがなかったのではうね。木造の建築もいいねとか、やつと最近になって気づいたくらいですか……」

観光国として日本を盛り上げたり、インバウンド需要だと騒いだりする前に、やつとおくべきことは多くありそうだ。

「私は、日本人ほど辛口の自国評を嫌う国民はいないんじゃないかと思っています。海外の人から、日本のものが美しいとか、すごい、素晴らしいという称賛は嘘ではないにしても、それがあまりにも過大に言われすぎているんじゃないか。ちょっとステレオタイプのお世辞を言われただけで喜んで、日本のもは何かから何までいいみたいに考えるのは、おかしいでしょう。もつと辛口の日本評にも耳を傾けるだけの、教養と判断力を身につけるべきです」

古くて新しい日本の「あかり文化」への意志

最新の素材やつぎつぎと生まれる新しいアイデアや機材など、照明やエネルギーをとりまく技術の変遷にキャッチアップする。さらに、習慣や嗜好の違いによる各文化における照明のあり方など、石井さんは照明デザイナー

として新しい知識を貪欲に吸収し、それを生かして、未知の分野へも臆することなく挑戦してきた。そんな石井さんが、「やつとこれから勉強できる時間が増えてきた」とうれしそうに顔をほころばせる。

奥飛騨 白川郷
合掌造り集落のライトアップ。

月明かりのような
柔らかな照明が
街全体を雪景色のなかに
浮かび上がらせる。



娘のリーサ明理（あかりさん）
最初に「ラボレーション」した作品。
「日仏交流150周年」記念行事で
セーヌ川にかかる橋や
シテ島の岸壁をライトアップした。

そのとき主流の技術は何か？ 誰に向けてその場所をつくるのか？ 世界中で新しい技術を駆使しながら自らの直感を信じて美を構築する、そんな仕事に没頭してきた石井さん。自分のやるべきことは、時代のなかで、変化していく。グローバルとローカルというふたつの物差しを自由自在に使い分けながら仕事をしてきた自信と自負があるからこそ、65歳を過ぎて自らの作品のなかに再発見したという「日本的なもの」についても、冷静かつ穏やかに認めることができるのだろう。

ただヨーロッパに做う（なま）だけではない、新しい明かりのあり方とはどんなものだろうか。石井さんの名を高めた「ライトアップ」は、東京タワーやレインボープリッジといった都会のランドマークだけではなく、世界文化遺産となった白川郷の合掌造り集落や倉敷の街並みなども美しく漆黒の夜に浮かび上がらせてきた。そこには、すでに古くて新しい日本の「あかり文化」への意志が強く感じられる。

「あるとき、フランスで照明デザイナーになった娘から『ママの作品は日本的』と指摘されました。向こうでは光と影の対比をドラマティックに演出することが多いのに対し、私のふわふわと漂うような光の使い方が日本的だと言われ、なるほどそうかもしれないと驚きました」

Ishii Motoko

東京生まれ。照明デザイナー。石井幹子デザイン事務所代表取締役。東京藝術大学美術学部卒業の後、フィンランド、ドイツの照明設計事務所に勤務。帰国以降も日本のみならずアメリカ、ヨーロッパ、中近東、東南アジア各地と国際的に活躍。2000年紫綬褒章受章。東京タワーや明石海峡大橋などの景観照明、白川郷合掌造り集落など歴史的建造物のライトアップ、愛地球博や洞爺湖サミットの照明計画、能の舞台照明など幅広く手掛ける。著書に『新陰翳礼讃』『光が照らす未来』照明デザイナーの仕事』などがある。